

研究報告書
第 74 号
C2-03

「教育県山形」の実像を探る

— 資料調査を通して —

平成16年3月

山形県教育センター

目 次

はじめに

I いのちを大切にす文化・・・・・・・・・・ 1

II 「教育県山形」の実像を探る・・・・・・・・・・ 5

III 「教育県山形」の実像を探る【資料編】・・・・・・ 15

おわりに

はじめに

自然豊かな環境、そして人情味あふれる県民性、それが山形県の風土です。

本県の教育は、この土壌の中で培われ、育まれてきました。江戸時代には、各村々に寺子屋があったようです。各地の堂舎には、今も、我が子の学業成就を願う絵馬を見ることが出来ます。教育を大切にしようとの県民のおもいは、古くから今日まで連続と受け継がれています。

本県は、昭和44年度に「山形県長期教育計画」を策定し、昭和51年度に「山形県教育振興計画」を作りました。その後、昭和59年度には「第3次山形県教育振興計画」、平成7年度に「第4次山形県教育振興計画」（4教振）を策定しました。平成11年3月、4教振の一部を見直した「教育をめぐる新たな情勢とその対応」は、平成16年度で最終年度を迎えます。

平成16年3月24日、「第5次山形県教育振興計画」が星寛治審議委員長から木村宰教育長に答申されました。平成17年度から10年間の、本県の教育の指針を示すものです。答申は、『いのち』そして『まなび』『かかわり』を基本テーマとして、山形らしい教育の推進を謳っています。

県教育センターは、今次振興計画を補完するものとして、『教育県山形』の実像を探る「資料調査を通して」をまとめました。「いのちを大切にす文化」では、県内に伝えられ受け継がれているさまざまな習俗や民話などにふれ、『教育県山形』の実像を探る」では、「普及・実践の山形」の教育を紹介した諸論文を、時代を追って整理しました。

今後、新たに付け加えなければならない論文等も多いとは思いますが、本冊子をこれからの山形の教育を語るときに資料として、活用いただければ幸いです。

最後に、本稿をまとめるに当たり、多くの方々からの御協力を賜りました。この場をかりて、心から感謝申し上げます。

平成16年3月24日

山形県教育センター

所 長 野 口 一 雄

I いのちを大切にする文化

はじめに

本県は、信仰の山湯殿山・月山・羽黒山の出羽三山を中央部に、鳥海山・蔵王山・吾妻山・飯豊山・朝日岳の高く美しい山々が隣県と境を接している。吾妻山を源とする母なる川最上川は、置賜から庄内まで県内各地を巡って流れ、他の大小の河川とともに、肥沃な田畑をつくりだした。山にはさまざまな生きものたちが棲み、川には多くの魚たちが泳いでいる。四季折々の変化に富むこうした自然は、豊かな実りをもたらし、人々に大きな喜びとさまざまな感動を与え、豊かな感性をはぐくんできた。

豊かな感性は、あらゆる「いのち」あるものを畏れ敬い、大切にすることを培った。祖母や母は、衣服の繕いや使い古したぞうきんを丁寧に洗って干し、縫い糸をほどいて感謝しながら始末する様子を子や孫の傍らで行い、ものの大切さを教えていった。ものを大切にすることを知る人は、「いのち」をも大切にするようになっていく。

県内に今もみられる、「いのち」を大切にすることをはぐくんできた伝承や慣習などについて、そのいくつかを紹介したい。

1 万物をうやまうところ

(1) 「サケの大助」の伝説

この伝説は、「旧暦10月20日ころの晩『サケの大助、今とおる』と大声で唱えながらサケの大助は川をさかのぼる。その声を聞いた者は3日以内に死ぬといわれるので、子どもたちは早く寝かされる。」というものである。これは広く東北地方にみられるが、特に本県に集中している。

人々がサケを無制限に捕獲することを戒め、また、大切な食料源でもあったサケへの感謝を表したものである。あらゆるいのちあるものを大切にしようという先人の優しい心配りが伝わってくる。飽海郡遊佐町吹浦には、サケ供養塔が立っている。

(2) お山信仰

山中には山の神がいる。山の神は、山中で生業を立てる者が信仰する神であるとともに、水を利用する農民の神でもある。山の神は春先に田の神となり水神となるのである。蔵王の水源を利用する地域に、旧暦5月21日ころ「お蔵王の田植」という行事があった。蔵王の田の神が御田で田植えを行うので、流域の農民は田仕事を休んだのである。水を大切にしよう、川を大切にしよう、との人々の思いがあった。

「鉞立」^{まさかりだて}の行事は、樹木を大切に自然の営みと共存しようとする人々の思いが感じられる。

(3) さまざまな供養塔

置賜地方を中心に立つ「草木供養塔」は、草木国土悉皆成仏の仏教思想に通じるものである。草木は森林をつくり、山を覆う。山には生命の源となる水神が宿る。生あるものだけでなく、万物すべてを慈しみ、大切にしようとの思いが、全国にもまれな「草木供養塔」を立てさせたのである。その他、「鳥居・華表供養塔」・「石灯籠供養塔」・「鳥獣供養塔」・「撞鐘供養塔」・「(石)橋供養塔」・「石段供養塔」・「敷石供養塔」などに万物を慈しむところをみることができる。

2 ひとを大切にすること

(1) ケヤキキョウダイ

温海町大岩川の浜中に、実の姉妹でない女の子もたちの間でくじを引き合って、ケヤキキョウダイ(契約姉妹)のちぎりを結ぶという、全国でも珍しい習俗が残っている。十二歳と十三歳の同年齢の女子たちが、一本のわらを二つに折ったくじを引き、合った者同士がケヤキキョウダイになるのである。ケヤキキョウダイは、生涯にわたって姉妹同様の交際を続けていくことになる。このケヤキキョウダイは、その二人と仲間同士との二重の関係を持っている。この二つの関係は、娘・嫁・姑の各時代を通じて続き、ムラの中での同年齢集団の基盤となり、ムラの生活を支えてきたといえる。

(2) ハヤマ信仰

ハヤマは県内各地にみられる。一般にハヤマは、死者の魂がとどまるところとの信仰がある。村山地方では、葉山での魂はさらに月山に上り、祖霊(神仏となった先祖の霊)となって天空に昇っていくと信じられた。祖霊は天空から子孫を見守り、また豊穡をもたらしてくれる。祖霊は、彼岸や盆に、人々のところに帰ってくる。子孫は先祖の霊をいつまでも大切にまつらなければならない。古者は、このような話を孫たちに語り、家族のきずなの大切さを教えたのである。

(3) モリの山信仰

庄内地方各地にモリの山と呼ばれるところがある。祖霊信仰の地である。死者の魂はモリの山で浄化され、近郷の山から月山や鳥海山に上がっていき、祖霊となって天空に昇るという信仰である。盆には、モリの山に祖霊が降りてくる。この信仰習俗は、平成12年国の「記録作成等を講ずべき無形の民俗文化財」に指定された。

(4) 山寺夜行念仏

山形市山寺は祖霊の宿る山、庶民信仰の地との信仰がある。旧暦7月6日、盆入りの夕方から、村山地方や最上地方などの人々が講中をつくり、山寺に集まるという習俗があった。現在、山寺と天童市高掬に講中が残っている。講中は、祖霊や万物の霊を慰めるため、夜を徹し、堂舎だけでなく、石・橋・木々などあらゆるものに回向や念仏をあげ、奥の院まで登った。翌7日の幣割祭には近郷のシシが集まり、万物の霊を慰めるために舞ったのである。平成11年「山寺夜行念仏とその習俗」は、国の「記録作成等を講ずべき無形の民俗文化財」に指定された。

3 親の子をおもうころ

(1) 絵馬「乳とばし図」

県内各地の堂舎に「乳とばし図」や「乳房図」・「乳房額」の絵馬が納められている。天童市の「乳とばし図」は、母が着物の胸元をはだけて二つの乳房をつかみ、乳をとばしている場面である。「えづこ」に入っている乳児が、その様子を見て笑っている。母は乳の出が悪かったのだろう。絵馬が納められた明治のはじめ頃、地元にミルクはなかった。乳の出が悪ければ、わが子のいのちが危険にさらされることになった。どうぞわが子を助けてください、私の乳が出ますようにとの願いを、このような絵馬に託したのである。また「乳房額」の乳房は、当時貴重だった木綿わたを使って作られているものが多い。子のいのちの大切さを、親は何よりも優先したのである。

(2) 「ムカサリ絵馬」

ムカサリ絵馬は、村山地方にみられる全国でも特異な絵馬である。幼くして逝ったわが子が後年、成人を迎えたとき、肉親がムカサリ（婚礼）の場面を描き、寺社に納めたのである。この絵馬の奉納も、山形の風土がつくりあげた習俗であろう。肉親の、子のいのちを愛おしむところが忍ばれる。天童市若松寺、村山市小松沢観音、東根市黒鳥観音、山形市山寺立石寺など、村山地方の寺社には今も奉納され続けている。

このような肉親の死をいつまでも愛おしみ、死者の霊を弔う供養の絵馬が県内には多く残っている。

4 民話の世界・こころある人

健やかなこころをはぐくむ教育は、民話（昔話）を語り伝えながら行われてきた。山形県にはたくさんの民話が残っており、民話の宝庫でもある。山形の自然環境が、多くの優れた語り部を生んだ。民話には人と動植物との共生の姿を見ることができ、心あたたまる美しい話が多い。今でも、民話は「夕鶴の里」など、県内各地で語り継がれている。

民話（昔話）にはよく「こころある人」という言葉が出てくる。「こころある人」とは、誠実でよく働き、他に迷惑をかけない、思いやりのある、それでいて、きちんとした自分の考えを持っている人のことである。かつて、祖父母は冬の夜長を孫たちといろりを囲み、民話を語り聞かせながら、やらなければならないこと、やってはいけないことを教え、「こころある人」をはぐくんできた。

おわりに

このように、本県の風土や、県内に残るさまざまな伝承や慣習が、子どもたちの「こころ」をはぐくみ、豊かにしていった。冬の寒さは忍耐力を培い、春秋の暮らしは情操をやしなったのである。大人は、動植物や水、木々など、恵みをもたらす自然界のあらゆるものに対して愛おしむことを折節に教えていった。それは、子の成長や肉親の生死での儀式の中であり、また毎年訪れる行事としてであった。私たちは自然と共に生きていることを、自らの生活を顧みながら、子どもたちに伝えていく責任がある。

本県は、祖父母・父母・子の三世代同居率が最も高い。祖父母が孫に昔話を語り、先人の知恵を伝える家庭の場が、これからも続いていくことを願っている。地域では今日、子どもたちに地域の伝統文化を伝える活動などが活発になってきている。私たちは地域との「かかわり」の中で学び、生きていることを子どもたちに教えながら、地域が子どもたちを守り、はぐくんできた伝統をこれからも大切にしていきたい。

『農家大学』という、江戸時代後期に村山地方で書かれた手書き本に、「子孫に教え譲るべきの宝は文学（学問）なり、物書かざる輩は恥辱を招き、読み書かざる族は儀理を知らず事必然なり、学んで道をまもらば、則ち不道に陥らず、自ずから子孫繁栄なり」とある。本県では、江戸時代を通じて、庶民（農民）も子孫に対する教育の大切さを説いてきた。その根底を流れるのは、「いのち」をはぐくむこころの教育だったことはいまでもない。

人間関係が希薄になったといわれる今日、多くの良き伝統を持つ本県は、これからも「いのち」をはぐくむ文化を発信し続けていくものと確信している。

【参考文献】

- ・『温海町の民俗』 温海町 昭和63年3月
- ・『日本の民俗 山形』 戸川安章 第一法規 昭和48年10月
- ・「風土記 心ある人」 大友義助 『ひろば』 東北原子力懇談会 平成15年11月

Ⅱ 「教育県山形」の実像を探る

はじめに

本県は、「理論の長野」、「施設の福岡」、「普及・実践の山形」として、日本三大教育県の一つに数えられることが多い。先学の論文の中でも教育県山形を紹介する記事を目にすることがある。それはいつ、何を根拠にいわれることになったのか。

今回、「教育県山形」に係わる資料・論文を整理し、また、これまで『山形教育』（山形県教育センター）の特集等で引用された文献等を掘り起こし、改めて「教育県山形」の実像に迫ることとした。調査に当たっては、山形大学教育学部、同大学附属図書館、東北大学附属図書館、県立博物館教育資料館、県史編集室、県立図書館等からご協力をいただいた。

内容については、次の項目をおこし論を進めた。

- 1 「教育県山形」へ
- 2 「普及・実践教育」の山形

1 「教育県山形」へ

「教育県山形」は、誰が、いつ頃から言い出した言葉なのだろうか。

『山形県教育史』（通史編中巻）では、横山栄次^{*1}と佐藤熊次郎^{*2}が名付けたとあり、時期は大正期以降のこととしている。さらに『決戦下の山形県教育史』（佐藤源治）には、「大正6、7年頃の『帝国教育』に当時の文部省督学官横山栄次の報告がもれ、長野県は進歩的であること、福岡県は施設、設備が良いこと、山形県は日々の生活、職業と取り組んで着実に実効をあげていることが書かれたといわれている。」とある。

残念ながら、大正6、7年頃のものでは確認できなかったが、『帝国教育』（第346号明治44（1911）年5月1日）の論文「山形縣の教育」（文部省視学官横山栄次）に、注目すべき文章がみられた。それは、第一に「本県知事の学校教育に熱心なること」を挙げ、さらにその教育設備内容が「東北諸県中第一位」で、その年、余目尋常高等小学校が優良小学校として文部省より選奨された、という内容である。この論文などが、本県は教育に熱心に取り組んでおり、かつ実績も上げている県として全国に知られる役割を果たすことになったものと思われる。『帝国教育』は月刊誌で、明治44年5月ですでに346号を数え、執筆者も文部省視学官、師範学校長など、当時の日本の教育をリードする人たちだった。

横山視学官が、本県の教育を他県よりも優れていると評価した内容を整理すると、第一に、若干の地域格差はみられるものの、教員については、非常に研究心が旺盛で、指導内容が進歩

*1 横山 栄次：山形県米沢出身 東京高師卒業後、各地の師範学校・中学校教諭となり、秋田師範学校長、北海道師範学校長を歴任。その後海外留学し、帰朝後文部省督学官となり、大正八年から奈良女子師範学校長を13年間勤めた。

*2 佐藤熊次郎：宮城県出身 広島高等師範学校附属小学校主事として活躍。日本初等教育の指導者。

的であり、児童生徒の良い成績はその成果であるということ。第二に、村民が学校教育に熱心であるとして、例えば、理髪業者が貧しい家の児童を対象に1日1人ずつ無料で散髪をしていることや、他地区から赴任してきた女教師の宿泊料を無料にしたこと。第三に、課外活動で撃剣^{*3}を教えたり、学校経費の経済的な運用を研究したりしていること。などが挙げられている。官民一体となって熱心に学校教育推進に取り組んでいるところが高く評価されたものと考えられる。「教育に熱心な県」や「東北諸県中第一位」等は「日本三大教育県の一つ」とか「教育県山形」と必ずしもイコールではないが、少なくともそのことを裏付ける有力な資料といえる。実際、「教育県山形」を語る根拠として挙げられる次の4項目などは、「教育に熱心」であることと深く結びついている事柄である。

- (1) 義務教育の就学率、出席率の高さ
- (2) 子守学級、学校給食の取り組み
- (3) 実業補習学校、青年訓練所の充実
- (4) 壮丁学力検査の良い成績

以下、順次説明を加えながら論を進めていく。

(1) 就学率・出席率

明治9（1876）年から昭和3（1928）年にかけての就学率・出席率は表1のとおりである。

この表から、本県の就学率が全国平均を上回るのは明治41（1908）年頃であり、出席率は明治45（1912）年に93.02%となり全国平均の92.47%を surpass ようになる。大正期になると就学率・出席率ともに引続き上昇を続け、大正5（1916）年の就学率は99.48%で全国3位、出席率95.73%で全国10位であった。4年後の大正9（1920）年はそれぞれ全国3位、同2位となり、その後もそれほど順位は下がらず全国の高位を維持した。明治44（1911）年に横山栄次が、論文に山形は教育に熱心な県だと書いたときには、就学率・出席率ともにほぼ全国平均に達していたことになる。

明治末期以降、本県の就学率と出席率が急上昇した事由について、「明治40年に県が『学齢児童保護会準則』を制定し、その後、各郡市・各町村ともにもっぱらその趣旨徹底を図ったためである」（『山形県教育史』通史編中巻）としている。具体的には、経済的な事由で学校に通学できない児童に対して、教科書・学用品、傘等を貸与し、衣類・食料品、履物を給付している。また、西村山郡役所では、出席率の良い学校には奨励金を出している。その結果であろうか、『教育時論』第961号（1912年2月）には、山形県の就学率が一躍全国第5位になったとある」と『山形県教育史』（通史編中巻）に記載されており、効果が顕著だったことが伺える。

このように、本県が明治末期に獲得した全国トップクラスの就学率・出席率は、県・郡・市町村・学校関係者が一致協力して教育に当たった努力の成果であるということができよう。就学率・出席率の上昇は、学力という質的な面での上昇にも当然結びつくこととなる。

*3 撃剣：剣術に同じ。刀剣、木刀、竹刀などで相手を攻め、身を護る術。

<表1> 「本県における初等教育の就学率、出席率の変遷」

(大塚浩介 『山形教育』233号 山形県教育センター 昭和60年)

年次	全 国				山形県			
	就 学 率*			出席率	就 学 率*			出席率
	男	女	計		男	女	計	
明治 9	54.16	21.03	38.32		55.04	14.65	35.84	
11	57.56	23.51	41.26		58.96	13.03	37.23	
13	58.72	21.91	41.06		66.52	16.40	42.78	
15	61.50	27.96	45.43		66.81	20.67	45.28	
17	63.23	29.69	47.10		67.73	19.69	45.09	
19	61.99	29.01	46.33		62.67	18.70	45.30	
21	63.00	30.21	47.36		68.84	20.75	46.59	
23	65.14	31.12	48.93		69.32	19.11	45.48	
25	68.24	33.61	51.99		74.57	23.45	50.40	
27	74.00	41.12	58.67		82.10	33.16	59.30	
29	79.00	47.54	64.22	79.86	84.87	39.55	63.68	78.89
31	82.42	53.73	68.91	80.17	87.39	45.18	67.71	80.56
33	90.55	71.90	81.67	83.17	92.83	63.38	78.91	84.10
35	95.80	87.00	91.57	85.55	96.16	80.92	88.81	83.48
37	97.16	91.40	94.43	87.87	96.79	85.62	91.39	85.56
39	98.16	94.83	96.28	90.33	97.76	89.82	93.90	88.41
41	98.73	96.86	97.80	92.45	99.22	98.13	98.68	91.33
43	98.83	97.38	98.14	92.35	99.45	98.97	99.22	91.92
45	98.80	97.62	99.32	92.47	99.44	99.19	99.32	93.02
大正 3	98.80	97.67	98.26	93.36	99.54	99.37	99.46	94.46
5	99.01	98.18	98.61	94.25	99.56	99.41	99.48	95.73
7	99.12	98.58	98.86	93.43	99.60	99.54	99.57	96.25
9	99.20	98.84	99.03	94.37	99.61	99.59	99.60	97.09
11	99.41	99.19	99.30	95.27	99.70	99.67	99.68	97.37
13	99.49	99.35	99.42	95.74	99.73	99.66	99.70	97.88
15	99.41	99.39	99.44	96.16	99.71	99.67	99.69	98.09
昭和 3	99.48	99.42	99.45	96.44	99.70	99.69	99.70	97.73

(註) 就学率は「文部省年報」の数値を記した。ただし就学、不就学の規程が後年の規程と違う明治14年～18年と、25年～27年の年次は、「日本近代教育百年史」(国立教育研究所刊)に従って修正した。出席率は「文部省年報」に尋常、高等科に分け全国及び府県別がのってくる明治29年より尋常科の数値を記した。

【注】表中の項目「就学率」は調査員で加筆した。

(2) 子守学級・学校給食

①子守学級

男子の就学率は、明治9(1876)年から全国平均を上回っていたが、女子の就学率の低さは著しく、県全体の就学率を高めるための大きな課題となっていた。原因としては、女子を就学させると家庭での労働力の削減につながることで、授業料の負担が困難なこと、女子に学校教育の必要性を認めないことなどが挙げられる。県や市町村は、女子教員の任用や裁縫科の授業を設けるなどし、女子の就学に理解を求めていった。さらに明治12(1879)年頃から「児護学校」

が試行され、子守のまま登校することを勧めている。授業は1日2時間、放課後に設けられた。明治20(1887)年代後半になると各地に子守学級が開設されるようになる。女子の就学率の低かった東村山郡では特に熱心で「尋常小学校特別学級設置規定」を設けて奨励した。その結果、明治30(1897)年の就学率30.79%から明治35(1902)年の就学率は89.24%と高まりをみたのである。

②学校給食

近代学校給食の発祥の地は、鶴岡市である。明治25(1892)年に鶴岡市大督寺境内にあった忠愛学校で開始されたと『山形県教育史』(通史編中巻)にある。弁当を持参できない児童も、午後からの授業が受けられるようになり、全国に先駆けた画期的な取り組みだった。

(3) 実業補習学校・青年訓練所

本県では明治27(1894)年以降、小学校に実業補習学校が付設された。その数は明治37(1904)年に急増し、大正末期には総数300を越えた。この数は全国でもトップクラスであった。本県は農業県ということもあり、義務教育終了後は引き続き農業補習学校に進む人が多かった。実業補習学校に占める農業補習学校の割合は、大正7(1918)年には97%にも及んでいた。青年たちは農業や土木・建設・林業などの実業に従事しながらも、このような教育の機会を得たことは、義務教育後、とぎれることなく継続的に学習することができるということで、より確かな学力の定着が図られることにもなったのである。

昭和に入り、青年訓練所が設置された。実業補習学校と同様に出席率が高く、向学心に燃える青年が多かったことを示している。次の資料<表2>はそのことをよく物語っている。

<表2> 「実業補習学校後期卒業者の比率と青年訓練所出席優良者の比率」

(『山形教育』233号 山形県教育センター 昭和60年 より抜粋)

実業補習学校後期卒業者の比率

年 度	本県比率と全国平均比率との差	順 位
昭和 6	+25.7%	1
昭和 7	+25.7%	1
昭和 8	+25.7%	1
昭和 9	+25.9%	1
昭和10	+25.9%	1

青年訓練所出席優良者の比率

年 度	本県比率と全国平均比率との差	順 位
昭和 2	+3.8%	12
昭和 3	+8.6%	4
昭和 4	+12.5%	3
昭和 6	+9.8%	8
昭和 7	+8.9%	10
昭和 8	+1.6%	19
昭和 9	+8.2%	8

(4) 壮丁学力検査の成績

壮丁学力検査は、明治38(1905)年から、20歳の徴兵検査に際し、各道府県で実施された。大正14(1925)年に全国統一問題が作成され、昭和2(1927)年からは受検者全員に同一問題で実施されている。本県は、昭和6(1931)年から12(1937)年頃まで抜群の成績で、5回日本一の栄誉に輝いている。昭和初期、不況にあえぐ時期でのこの快挙は政府をも驚かせたのではなかったかと思われる。このことは、次々と視察団の来県をみることとなった。

次の＜表3＞は壮丁学力検査の本県成績である。

＜表3＞ 「壮丁学力検査の本県成績」

（「壮丁教育調査の成績概況」 『山形県教育史』 通史編中巻

山形県教育委員会 平成4年 より抜粋）

年度	教科	順位	年度	教科	順位	年度	教科	順位
昭和6年	国語	1	昭和10年	国語	1	昭和14年	国語・算	6
	算術	1		算術	6		国語	9
	公民	1		公民	1		数学	6
	平均	1		平均	1		平均	6
昭和7年	国語	1	昭和11年	国語・算	1	昭和15年	国語・算	11
	算術	1		国語	1		国語	24
	公民	1		数学	10		数学	24
	平均	1		平均	1		平均	18
昭和8年	国語	2	昭和12年	国語・算	1	昭和16年	国語・算	6
	算術	1		国語	8		国語	16
	公民	1		数学	2		数学	15
	平均	1		平均	2		理科	5
昭和9年	国語	3	昭和13年	国語・算	8	昭和17年	平均	10
	算術	2		国語	14		国語・算	19
	公民	2		数学	4		国語	35
	平均	2		平均	4		数学	34
							理科	16
							平均	29

以上述べてきたように、義務教育の就学率・出席率が向上して、全国の上位を占めるようになったこと。明治中期から取り組み始めた実業補習学校、青年訓練所などの充実が全国トップクラスになったということ等。その量的な面だけではなく、壮丁学力検査日本一5回という質的な面においても全国トップの成果を上げている。したがって、「教育県山形」という評価は、昭和初期には定着していたと考えられる。

2 「普及・実践教育」の山形

「教育県山形」として高い実績を上げた本県は、その後どのような普及・実践を行っていったのか。特色ある教育についてみていく。

（1）へき地教育・複式学級

「邑ニ不学ノ戸ナク、家ニ不学ノ人ナカラシメン」という「学制」のめざした姿を実現するため、本県では、明治期から本校に通学できない地域には分教場を開設した。本県の場合、山間へき地の小集落が多く、そこに分教場を開設し維持していくには多くの困難があったが、関係者の努力によって数は次第に増えていく。大正元(1912)年度の県内の分教場数は151で、大正15年度には193に上った。それでも分教場に通えない集落に対しては、県では家庭教育所を設け、教育がくまなく行き渡るように巡回指導を行っている。

分教場や家庭教育所は大部分一学級で、一人の教師が全学年の子どもを指導する複式学級編制であった。本県は、複式学級の指導法がまだ確立していない段階で、意欲に燃える教師たちが、全国に先駆けてその指導法を研究し確立していった。

その地道な研究・実践は、昭和20年代以降、以下のような成果となって現れる。

①複式学級の方向性を示す書の発行

・昭和29年山形県教育委員会と文部省の共同研究で『イリの村の生活と子ども』発行

②複式学級の効果の上がる指導法として同単元指導の開発

・昭和31年本県で開催の「第五回全国へき地教育研究大会」で検証

・昭和43年複式学級用の教科書『楽しい算数』（日本標準）発行

③地域に立脚した学校経営としての表彰

・昭和39年東根市立東郷小学校入分校 文部大臣表彰 読売教育賞

・昭和41年「特色ある分校経営」朝日町立立木小学校木川分校 読売教育賞

・昭和43年大江町立七軒西小学校古寺分校 吉川英治賞

このように、地域を見つめ、地域の特色を生かした輝かしい教育活動を展開したのである。その他、西村山教育出張所の「複式学級指導計画例」がそのまま文部省の指導計画例に取り入れられたことなども挙げられる。

以上のように、本県は複式学級指導に関しての先進県であった。

（2）定時制高校・通信教育

本県は明治時代から、勤労青少年教育にはすばらしい実績を持っていた。実業補習学校、青年訓練所、青年学校、夜間中学校、青年学級、青年教室、産業開発青年隊等である。特に、昭和初期において、実業補習学校、青年訓練所、青年学校は就学率・出席率ともに高く、量的にも質的にも大変充実していた。青年学校の査閲成績は全国に誇る良い成績であったといわれている。その流れは、昭和23年に新制高等学校が発足し、定時制課程の設置が認められると、そのまま定時制高等学校に引き継がれていった。

発足当時の昭和23年、本県定時制高等学校は、独立中心校18校、併置校27校、分校80校という、全国にもその類をみないほどの定時制高等学校が開設された。旧制中等学校の所在する地域には、定時制併置と同時に、その周辺に分校を配置した。従来中等教育機関に恵まれなかった地域には、独立中心校の他、周りに多くの分校を配置して、県内隅々まで新制高等学校の教育の場を拡充していったのである。終戦直後の荒廃した郷土にあって、青少年の健全育成は緊急の課題であり、県と地域社会が一体となって青少年教育を推し進め、「教育県山形」の伝統を受け継ぎ実践していったといえよう。

次の＜表4＞は全国との比較である。数値は、全国が昭和25年、本県は昭和24年のものである。単純に計算しても、中心校数と分校数の合計で1県平均58校程度なのに対し、本県は120校と2倍以上に上っている。驚くべきことに生徒数にいたっては、全国の1割近くを占めている。本県がいかに定時制高校教育に力を注いだかが伺えると同時に真面目で向学心に燃える青年の多い実態が浮かび上がる。（『山形教育』233号佐藤源治「定時制高校と高校教

育の普及』、『山形教育』100号五十嵐英一「定時制教育の曲折」より。）

<表4> 「定時制高校設置状況」

(佐藤源治 『山形教育』233号 山形県教育センター 昭和60年 より作成)

	山形県 (%)	全 国
中心校数	45校(3.4%)	1,330校
分校数	75校(5.4%)	1,389校
教員数	732人(5.4%)	専任教員 13,450人
		兼任教員 14,678人
生徒数	29,275人(8.8%)	333,355人

【注】山形県の()内は全国に対する比率を示す。

通信教育は、昭和23年、県立第一高等学校通信教育部(定員200名)と県立鶴岡第一高等学校通信教育部(定員100名)が置かれたことに始まる。両通信教育部とも、募集定員をはるかに上回る応募があり、働く青少年の勉学に対する意欲は高かった。

昭和30年には通信教育でも高等学校卒業の資格が得られることとなる。

(3) 綴り方教育

現実主義に立つ綴り方教育は、大正新教育運動の中で広がりを見せ、本県でもさかんに綴り方・童謡指導が行われた。やがて昭和になると、より現実の生活に目を向けた、生活綴り方教育の考えが起ってくる。

戦前の生活綴り方教育は、『北方教育』(昭和10年)運動に加わる形で実践されてきた。戦後は、その流れを背景にして展開していく。

「雪がコンコン降る 人間は その下で暮らしているのです。」

この短い詩で始まる『山びこ学校』(昭和26年)は、世の注目を集め、多くの人々の心を突き動かした。江口江一「母の死とその後」は文部大臣賞を受賞している。生活を綴るという生活記録運動は、自分の足下を見つめ直し、丁寧に記録するというリアリズムの方法によって課題を発見し、認識を拓く学習の新しい流れをつくり、学校外にも波及し、全国的に広がっていた。

その後本県でも『山びこ学校』にとどまらず、共同学習、青年学級、児童文化研究会や地域青年・婦人の生活記録運動が展開していく。

(4) 社会教育

戦後、本県の社会教育行政や社会教育活動の中には、独創的な企画や活動が数多くみられた。山形が全国に先駆けてはじめたことを列挙すると、「青年学級」、「若妻学級」、「産業開発青年隊」、「公明選挙運動」、「共同学習」等が挙げられる。公民館が多く、文部省表彰を受けた優良公民館も多い。これも社会教育の充実ぶりを示す一つだろう。

『山形教育(新教育)』1号(昭和22年)から100号(昭和38年)の中で、社会教育に関する記事として次のものがある。

- ・「勤労青年教育の私案」
- ・「勤労青年の教育が主流」
- ・「勤労青年の教育はどこへ行く」
- ・「働きつつも向学の意欲に燃ゆる男女勤労青年に対し勉学の機会と場所を与えよ」

いずれも、勤労青年教育が昭和20～30年代の重要な課題であることが強く意識されている。「青年学級」をはじめとするさまざまな社会教育活動は、その課題に応える取り組みであった。

中でも「山形県産業開発青年隊」(昭和26年)は、グループ単位で、昼間は仕事に従事し、夜間・休日は相互学習をして資格を取得し、自立をめざす画期的な運動であった。グループ単位の活動は、戦後アメリカから導入された「グループワーク」の理論を踏まえ、農村青年の実情に合わせて改善され、発展して成立した「共同学習」という考え方の実践であった。農村青年たちの身近な問題や厳しい現実をどう考え、一般化し、小集団の討議を重ねる中で解決の方向を見出していこうとする。その精神的指導者として、連合青年団事務局長寒河江善秋*4の活躍がある。この「産業開発青年隊」は農林省・建設省に注目され全国的な運動になり、後に日本の若者が開発途上国に赴いて職業教育と地域開発に協力する青年海外協力隊(昭和40年)に発展していく。戦後本県の社会教育活動は、こうした青年団活動をベースに、地域と密着した形で自主的に展開され、大きな実績を上げている。

近年では高校生を中心とする青少年ボランティア活動が「山形方式」と呼ばれ、全国的に注目を集めている。学校枠を越えて地域単位で自主的に活動しているところが、他県にはみられないと高く評価されている。

おわりに

今回、「教育県山形」の実像を探るというテーマで調査を進めてきた。これまでいろいろな形で、いろいろな場を取り上げられてきたことをまとめてみて、先人たちの教育に掛ける熱意に頭の下がる思いがすると同時に、多くのことを学ばせていただいた。近代教育の草創期から、本県がこのようにさまざまな困難を乗り越えて、青少年の育成に努めてきたことを、私たちは真摯に受け止めて伝えていかなければならない。さらに二十一世紀に相応しい形で「教育県山形」の伝統を紡いでいく責任を、改めて痛感する。

なお、本論を裏付ける資料を別に添付する。

最後にお忙しい中にもかかわらず調査に協力してくださった関係各位に対して、この場を借りて心から感謝申し上げます。

*4 寒河江善秋：1920年東置賜郡川西町生。山形県連合青年団事務局長、後に日本青年団協議会の副会長。共同学習運動や産業開発青年隊運動をすすめる上で活躍。

【主な参考文献】

- ・「山形県教育史資料」 第1～5巻 山形県教育委員会 昭和49～54年
- ・「山形県教育史資料 統計編」 第1～第8巻 山形県教育委員会 昭和55～61年
- ・「山形県教育史 通史編」上・中・下 山形県教育委員会 平成3～5年
- ・「山形県学校史年表」 山形県教育研究所 昭和48年
- ・「昭和5年 山形県統計書」 山形県 昭和7年
- ・「昭和9年 山形県統計書」 山形県 昭和11年
- ・「学制百二十年史」 文部省 平成4年
- ・「カリキュラム構成の基礎研究 豊田村教育計画」 第1集 山形県教育研究所 昭和26年
- ・「教育計画の実際 豊田村教育計画」 第2集 山形県教育研究所 昭和27年
- ・「山形県戦後教育実践の史的研究 教科等教育編 教育行政編」山形県教育研究所 昭和42年
- ・「山形県戦後教育実践の史的研究 学校経営編」山形県教育研究所 昭和40年
- ・「決戦下の山形県教育史」佐藤源治 決戦下の山形県教育史出版協賛会 昭和52年
- ・「山形県教育史」 上倉裕二 山形県教育研究所 昭和27年
- ・「山形県教育史（人物編）」 上倉裕二 山形県教育研究所 昭和28年
- ・「山形県教育年報」山形県教育委員会事務局 昭和25年
- ・「山形県史」第5巻 山形県 昭和61年
- ・「長野県政史」第2巻 長野県 昭和47年
- ・「福岡市史」第2巻 大正編 福岡市 昭和38年
- ・「視学要訣」 渋谷徳三郎 実文館 明治41年
- ・「日本近代教育百年史」第四巻 学校教育（2） 国立教育研究所 昭和49年
- ・「山形県教育史論」第13号 山形県教育史研究会 平成12年
- ・「帝国教育」第346号 帝国教育会 明治44年
- ・「日本新教育百年史」3北海道・東北 玉川大学出版部 昭和44年
- ・「日本新教育百年史」7中国・四国 玉川大学出版部 昭和45年
- ・「山びこ学校」 無着成恭編 岩波文庫 平成7年
- ・「教育山脈 日本の教育激動の100年」 吉村達二 学陽書房 昭和49年
- ・「山びこ学校から何を学ぶか」 須藤克三 青銅社 昭和26年
- ・「イリの村の生活と子ども」 文部省 昭和29年
- ・「作文教育と児童文化運動」 土田茂範編著 ぐるうぶ場 昭和60年
- ・「閉課程記念誌ー共学互助の灯をかがけてー」
山形県立山形東高等学校通信制の課程 平成11年
- ・「50周年記念誌」 山形県立鶴岡南高等学校通信制課程 平成11年
- ・「真壁仁研究」第4号 真壁仁研究編集委員会編
東北芸術工科大学東北文化研究センター 平成15年
- ・「稿本 山形県連合青年団史」 編集委員会代表高桑喜之助 豊文社 昭和37年
- ・「ヒューマン」88～89号 ヒューマンサービス研究所 昭和53年

- ・「青年」第153～155号 日本青年館 昭和57年
- ・「クロスロード」JICA情報誌9月号 国際協力事業団 青年海外協力隊事務局 平成15年
- ・「内外教育」 時事通信社 平成14年9月6日
- ・「山形教育」1号～100号 山形県教育センター 昭和22年～昭和38年
- ・「山形教育」233号 山形県教育センター 昭和60年

Ⅲ 「教育県山形」の実像を探る【資料編】

1 「教育県山形」へ

「教育県山形」の記述

- ①『山形県教育史』通史編中巻（山形県教育委員会 平成4年）第1章第2節・第2章第3節
 - ・横山栄次と佐藤熊次郎が「教育県山形」と名づけたと伝えられる
 - ・本県の就学率と出席率が高いことと、壮丁検査時の学力検査の成績がよかったことから、「日本三大教育県」の一つで「普及の山形」と言われるようになった。
 - ・学齢児童保護会などによる就学率と出席率の向上があり「教育県山形」と言われるようになった。
 - ・山形県が……「教育県山形」と称されるようになった時期については、明確とはいえないが大正期以降のことらしい。
- ②『山形県史』第5巻（山形県 昭和61年）
 - ・この突出した本県就学率向上の過程を当時広島高等師範学校教授であった佐藤熊次郎は注目し、……日本三大教育県に本県を位置づけた。……当時の県内マスコミには登場しないが、師範学校ではしきりに説かれるようになり、……
- ③『カリキュラム構成の基礎研究』（山形県教育研究所 昭和26年）東村山郡豊田村長今野辰吉の序
 - ・山形県は教育に熱心な県として、全国にその名を成してきた……
- ④『山形教育（新教育）』1号～100号（山形県教育センター 昭和22～昭和38）
 - ・「山形県が日本一の教育県等と言われている」「教育県の榮譽を担ってきた」「教育に熱心な県」「三大教育県の一つ」等の記述が17箇所ある。
- ⑤『山形県教育史論』第13号（山形県教育史研究会 平成12年）
 - 【この文献では『やまがたの散歩』の「県きょういくの流れ」というリレー執筆を転載しており、この中の渡部史夫の『普及の山形』の背景」という論文より】
 - ・山形県が長野県、福岡県と共に、三大教育県と呼称されるようになった時期については、一般には大正期以降のようで、「研究の長野」「施設の福岡」「普及の山形」と称されており、それぞれの特徴が反映されている呼称といえよう。
- ⑥『決戦下の山形県教育史』（佐藤源治 昭和52年）序章「決戦下教育の史的考察」
 - ・本県が教育県といわれたのは第四期である。大正6、7年頃の「帝国教育」に当時の文部省督学官横山栄次の報告がもれ、長野県は進歩的であること、福岡県は施設、設備がよいこと、山形県は日々の生活、職業と取り組んで着実に実効をあげていることが書かれたといわれている。私が大正の末から昭和にかけて山形師範学校に在学していた頃、この3県の特色として、理論の長野、設備の福岡、普及の山形といわれたことが記憶に残っている。又他県民からも聞いたことがあるので、このことが全国的にいわれていたことは確かである。小学校への就学率が高いこと、出席率がよいこと、教育がへき地に普及していること、それに実業補習学校、青年訓練所、青年学校は就学率、出席率ともに高く、青年学校の査閲成績は全国に誇っていたのである。又徴兵検査の際の学力成績がよかったともいわれ、これも教育普及を物語っている。何れにしても教育県山形を築きあげたことは、ひとりの教師の力によるものではなく、県民全体の努力の結果であって、このことはすばらしいことといわねばならない。
- ⑦「山形県の教育」（文部省視学官 横山栄次 『帝国教育』第346号 帝国教育会 明治44年5月1日）
 - ・「第一に記すべき事項は馬淵本県知事の学校教育に熱心なること」と述べ、「本県の学校教育が、設備内容その宜しきを得て、近年特に顕著なる進歩をなし、東北諸県中第一位を占むるの觀あ

る」、「本年春優良小学校として本省より選奨せられたる東田川郡余目尋常高等小学校」、特に小学校については「本県小学校の教員は概して研究心に富み競うて改良進歩を図りつつあるを認む」と論じている。

- ・理髪業者にして当校に於ける貧家の児童に対し一日一名づつ無代斬髪を為し居るものあること
- ・他所より来れる女教員等を無代にて宿泊せしめ居るもの数名あること
- ・学校の建築等に際しては悦んで寄付するものの多きこと
- ・盲生一名を分教場に入学せしめ尋常四年生として他の児童と共に教育し居ることはなり同訓導は此不幸なる盲生を教育する為東京盲啞学校に至りて特に教育法を学びたりと云ふ
- ・高等科の男児に課外遊戯として撃剣を課し特に教師を聘して之を授けしむ
- ・校長教員一致して教授に関する研究に努めその結果頗る見るべきものあり
- ・学校の経費を経済的に使用する方法を研究して之を實行しつつあり

(1) 就学率・出席率

- ①『山形県教育史』通史編中巻（山形県教育委員会 平成4年発行）第1章・第2節
 - ・『教育時論』第961号（1912年2月発行）の久木幸男著「山形縣児童保護の效果」に「……重に教科書・学用品の貸与、衣類・食料品及び履物の給与、雨具の貸与等にして、（中略）同会設置以後不就学及欠席児童の數大に減少し、就学歩合に於て全国中極めて劣等在りたる同県は、一躍にして全国第5位にすすめたり。……」と記載してある。
- ②『山形県教育史』通史編中巻（山形県教育委員会 平成4年発行）第1章・第2節
 - ・当時、西村山郡役所では各学校から出席統計を提出させ、出席のよい学校には郡長名で賞状を与え、そのうえ一等には金10円、二等には金7円、三等には金5円の賞金を出して出席を奨励していた。」また、「本県が当時獲得した全国トップクラスの就学・出席率は、県・郡・市町村・学校の教育関係者が、一致協力して督促に当った並々なぬ努力の成果であったのである。
- ③『山形縣教育年報』昭和25年度版（山形縣教育委員會事務局）「教育のあゆみ」
大正4（1915）年 小学校就学歩合全国第3位、出席歩合全国第10位

(2) 子守学級・学校給食

- ①『山形県教育史』通史編中巻（山形県教育委員会 平成4年）第1章・第2節
【子守学級】について
 - ・明治初年の学校創設以来、就学率を高める努力をしても、親たちの生活困窮のため、思い通りにならなかった。特に弟妹の子守のため就学できない子女が多く、その対策として「子守学級」を設けた。その必要性は明治10年代から提唱され、20年代になると開設する学校が出て、30年代には相当数の学級が設置され、大正期を迎える。明治期、最も組織的に実施したのは寒河江町と西根村（現寒河江市）であり、1896（明治29年）年に「寒河江町、西根村学校組合子守教育場設置規程」をつくり、町村内小学校に5カ所の子守教育場を設置した。また、女子の就学率の低い東村山郡では「尋常小学校特別学級設置規程」をつくり、子守のままの就学を奨励した結果、女子の就学率は1897（明治30年）年度30.79%から1902（明治35年）年度89.24%に高まった。
 - ・子守学級は望ましいことではないが、大正期になっても次善の策として子守学級を開設したり、子守のままでの登校を認めてきた。……子守学級開設は救済措置として各学校で自主的に考えた方法であった。そのため、子守学級のことは県の統計書の「学事の状況」の中には一度もでてこない。
- ②『山形県教育史』通史編中巻（山形県教育委員会 平成4年）第1章・第2節

【学校給食】について

- ・日本の学校給食は、山形県鶴岡市大督寺境内にあった忠愛学校で1889（明治22）年に開始されたという。（「忠愛学校設置願」と「荘内忠愛学校開業式祝詞集」の資料により給食を始めたのは1892（明治25年）年6月から1893（明治26年）年6月頃と推察される。）
- ・1887（明治20年）年から1892（明治25年）年までは午前中のみの授業であった。1892（明治25年）年4月以降には、午後にも授業が行われる学年が出てきて、昼食を持ってこれない生徒が出現し、時折、弁当の盗難事件もおこったという。これを教育的に指導する目的で行われたのが、そもそもの学校給食の始まりと思われる。

（3）実業補習学校・青年訓練所

①『山形県教育史』通史編中巻（山形県教育委員会 平成4年）第1章・第3節

- ・「研究の長野」、「施設の福岡」、「普及の山形」と一般に称されており、それぞれの特徴に対する呼称が付されている。本県の場合、明治末期以降、小学校に付設されている農業補習学校が急増し、小学校卒業後、引き続き農業補習学校で職業教育及び公民教育を受ける青年たちが多いという教育的風土を有している。
- ・このような優秀な成績をあげることができた要因はなにか。尋常小学校、高等小学校における高い就学率と良い出席率、実業補習学校や青年訓練所への進学、教育に対する高い関心と熱意などいろいろあげられようが…
- ・明治後期から大正期にかけて、尋常小学校や高等小学校の卒業後、実業補習学校へ進む人が多かった。
- ・昭和期に入ると、青年訓練所が設置されるようになった。
- ・（「青年訓練所出席優良者の比率」から）どの年次も全国平均より良くなっており、それだけ本県の青年達は真面目に青年訓練所に通学して、意欲的に学ぶ人が多かったことを示しているといえよう。青年訓練所に通う出席日数が良好なことは、それだけ勉学時間も多く、自ら学ぼうとする習慣も身につけ、それだけ知識や社会経験も豊かになってくるので、壮丁教育調査において良い成績を収め得た要因の1つになっていると思われる。
- ・本県の場合、教育課程の面で特に注目されるのは、実業補習学校後期卒業生の比率が高かったことである。…実業補習学校の後期卒業生が4割台に達していることは、当時いかに向学心に燃えている県民が多かったかを知らせてくれる。
- ・1938（昭和13）年以降、本県の成績順位が若干下がってくるのは、1935（昭和10）年に実業補習学校と青年訓練所とが統合して青年学校が設置され、他の府県でも青年学校への入学者が増加し、その差がみられなくなってきた結果といえよう。
- ・山形県は壮丁教育調査でみる限り、1931（昭和6）年から1937（昭和12）年頃までは抜群のよい成績をあげており、教育県「普及の山形」にふさわしい成果をあげている。農業補習学校や青年訓練所を中心とする学習が青年たちに確かな学力を定着させるのに大きな役割を担っていたといえよう。

②「壮丁教育調査にみる青年の学力状況」

（渡部史夫 『山形教育』233号 山形県教育センター 昭和60年）

- ・明治後期から大正期にかけて、尋常小学校や高等小学校の卒業後、実業補習学校へ進学する青年が多かった。本県は農業県なので、農業補習学校へ進む人が圧倒的多数であった。
- ・明治41年には273校の実業補習学校が置かれているが、そのうちの75%が農業補習学校であった。

2 「普及・実践教育」の山形

（1）へき地教育・複式学級

①『山形県教育史』（上倉裕二編 山形県教育研究所 昭和27年）

【へき地教育】について

- ・本県は地勢上山間僻地の部落が多く、通路困難で到底通学できないものが、県下八郡二十三ヵ村三十四部落の多きに及ぶ。これらの部落中冬期を除く外通学するもの若干あるが、多くは不完全な家庭教育所で教育を受け、甚だしいのは全く不就学に終わる。この改善に努め、部落戸数十五戸以上の所に対しては分教場を設置させ、他町村小学校に通学し得る距離では委託教育の方法によらせ、尚適当な学習の途がない児童に対しては、家庭教育所を設け、小学校と親密な関係を保たせ、少なくとも教育所二ヶ所に対し相当な教員一名を聘し巡回指導させ（中略）効果を挙げることを期待した。

②『山形県教育史』通史編中巻（山形県教育委員会 平成4年）第1章・第2節

- ・『山形県統計書』による「I—表11都市別複式学級をもつ学校数（分教場を除く）」より抜粋

複式学級を持つ学校数

年次	尋常科		高等科	
	5学級以下の学校数	学校総数	複式学級	学校総数
1913年(大正2)	188	384	130	194
1918年(大正7)	169	371	122	203
1925年(大正14)	117	350	105	231

- ・大正2年度の5学級以下の学校は県全体で188校で、小学校総数384校の49%に当る。県全体では約半数の学校が複式学級をもっていたことになる。県全体の複式学級数は413校となり、尋常科の学級総数2,482学級の16.6%に当る。高等科が1学級だけというのは130校で、高等小学校総数194校の2/3に当る。このほかに分教場が154あり、その学級数は194学級であった。
- ・明治期は複式学級の編制は普通のことであり、複式学級の指導上の問題が論議され、講習会が開催されるのは大正中期以降である。
- ・1920（大正9）年に開催された「複式教授講習会」の参加記録では佐々木郡視学、大森県視学の講演要旨が「近年本県は全国有数の教育県として認められているが、県下全般の初等教育の現況をみれば、中央部の少数の学校を除いては未だ優れりということ能わず。殊に単級や複式学級の教授の如きは、十年一日の如くにして、今尚旧慣を脱し得ず。…」という内容のものであった。

③『山形県教育史』通史編中巻（山形県教育委員会 平成4年）第1章・第2節

- ・戦後、山形県は全国の先頭に立って、へき地・複式教育振興に努力してきた。その内容を大別すると、へき地の子どもをへき地社会の実態の中で考えていくべきであると主張し、へき地社会の科学的な調査をしたことと、複式学級の効果的指導法として「同单元指導」（最初は「同題材指導」といった）を研究したことである。

④『山形教育』100号（山形県教育センター 昭和38年9月19日）

【文部省へき地教育担当者山川武正の記述】

- ・山形県はへき地教育の基本的な研究と、複式学級の指導法改善という2つの面で、わが国のへき地教育振興に大きな貢献をしたといえる。しかもその2つの面は、へき地教育振興上歴史的

な画期的な分野である。

- ・大正期は新しい息吹の中で教育が充実した時期である。複式学級教育も児童中心主義の考え方から指導法が検討され、直接指導と間接指導の指導上の留意点が明確化され、子どもたちに自主的に学習されるべきことが強調され、十年一日の如き複式教育に、新風を吹き込むことになったのである。

⑤『山形県教育史』通史編下巻（山形県教育委員会 平成5年）第1章・第2節

【文部省の「複式学級指導計画例」】

- ・特に算数科の委員には西村山教育出張所の横清哉指導主事が委嘱されていたので、県教育研究所の指導計画の骨子がそのまま文部省の指導計画例に取り入れられる形となった。

(2) 定時制高校・通信教育

- ①「定時制教育の曲折」（五十嵐英一 『山形教育』100号 山形県教育センター 昭和38年）
- ②「定時制高校と高校教育の普及」（佐藤源治 『山形教育』233号 山形県教育センター 昭和60年）
- ③『閉課程記念誌—共学互助の灯をかかげて—』（山形県立山形東高等学校通信制の課程 平成11年）
『50周年 記念誌』（山形県立鶴岡南高等学校通信制課程 平成11年）

- ・通信教育は、昭和23年4月、山形の県立第一高等学校通信教育部と鶴岡の県立鶴岡第一高等学校に通信教育部が置かれたことに始まる。第一高校通信部は定員200名に対し295名が、鶴岡第一高校通信部では定員100名に対し105名が入学した。両通信教育部とも、募集定員をはるかに上回る応募があり、働く青少年の勉学に対する意欲は高かった。
- ・設置された昭和23年、第一高校通信教育部では、5月には「山形第一高等学校通信教育部報第1号」を発行している。また同月、生徒と職員の組織である通友会が発足し、実地指導講義や巡回講習会も始まった。鶴岡第一高校通信教育部も、通友会と称する学友会（生徒会）を発足した。昭和24年には、東北地区通信制研究協議会が山形第一高校で開催され、翌年には、山形県高等学校定時制通信教育振興会が結成された。
- ・昭和30年には通信教育でも高等学校卒業の資格が得られることとなった。

(3) 綴り方教育

- ①『教育山脈 日本の教育激動の100年』（吉村達二 学陽書房 昭和49年）

- ・昭和二十二年四月、戦後の六三制新教育がスタートしたが、制度ばかりでなく、教育の理念や方法も一変した。なによりも個人の人權を重んじ、自由を尊重するという理念や、経験から学ぶというデューイのプラグマティズムに裏付けられたアメリカ式の経験主義的教育方法は、戦前の教育になれた現場の先生たちをとまどわせた。そうした破綻と混乱の中にあって、先生たちの間に一つの光明をともしたのが、無着成恭の「山びこ学校」だった。

「雪がコンコン降る 人間は その下で暮らしているのです」

石井敏雄（当時、山形県南村山郡山元村山元中学校二年）の短い詩ではじまるこの文集は、二十六年三月に発行されるとたちまちベストセラーになり、いまなお息長く、十八版十萬部近くを売りさばいているという。映画や劇にもなり、英語、ヒンズー語、ユーゴスラビア語、中国語にも翻訳され、東北の一寒村にひっそりとたたずんでいた山元中学は、文集の指導者である無着の名とともに、一躍世界的に有名になった。

- ②『山びこ学校』（無着成恭編 岩波文庫 平成7年）

【昭和31年 坪田譲治の推薦文より】

- ・この本は、昭和二十年代の日本の子どもたちが、「いかに生きるべきか」と呼びかけている必死

のことばであります。私など、もとよりこれにこたえる答はもっておりません。五年たちましたが、これにこたえ得た人はいないように思われ、何かすまない気持ちで落ちつきません。現代日本では、こたえ得る人がないように思われるのであります。子どもたちにたいし、もうしわけないしだいですが。しかしそれだけに、みんなで読み、みんなで考えたいものであります。

【昭和26年 佐藤藤三郎の答辞より】

- ・私たちが中学校で習ったことは、人間の生命^{いのち}というものは、すばらしく大事なものだということでした。そしてそのすばらしく大事な生命も、生きて行く態度をまちがえば、さっぱりぬちのないものだということをなつたのです。
- ・私たちはそういう教育を受けて来たのです。私たちの骨の中しんまでしみこんだ言葉は「いつも力を合わせて行こう」ということでした。「かげでこそこそしないで行こう」ということでした。「働くことが一番すきになろう」ということでした。「なんでも何故？ と考えろ」ということでした。そして、「いつでも、もっといい方法はないか探せ」ということでした。

(4) 社会教育

- ①「戦後における社会教育の系譜と課題」

（佐藤信一 『山形教育』100号 山形県教育センター 昭和38年）

- ・山形県は全国でも、社会教育の先進県だといわれている。もちろん、その意味するところは、人によっていろいろ異なるであろうが、戦後の社会教育の混乱期において、山形県が生み出した発想や運動が、全国の社会教育分野に広まっていったものが数多くある。青年学級をはじめ、若妻学級、産業開発青年隊、公明選挙運動、共同学習など、すべて、本県がその源流をなしている。
- ・青年学級は昭和23年4月定時制高校に進学し得ない勤労青年のために、「長期教養講座」として開設され、本県がその発祥の地である。若妻学級とか若妻会が最初にできたのは本県の大山町西郷地区（旧西郷村）で、昭和29年7月に誕生した。
- ・産業開発青年隊は、昭和26年6月本県の青年団が次三男対策として提唱したものが全国的規模に発展したものである。
- ・昭和27年5月山形県連合青年団と県婦人連盟が、選挙浄化委員会を結成し、選挙の浄化運動がきっかけになって、公明選挙運動が全国的に盛んになったのである。
- ・県の連合青年団は産業開発青年隊や公明選挙運動のなかから「共同学習」（昭和29年）という新しい学習方法を生み出し、それが全国的に広がっていったのである。
- ・その他文部省表彰の優良公民館の数が多いうことがあげられる。

- ②「寒河江善秋研究 その1」（矢口徹也 『青年』第153号 昭和57年）

【『たったひとりの革命』より】

- ・社会を変革するということは、自己の対立物としてそれを変革するのではなく、自己を含めた社会を自己の変革を通じて同時に変革するというでなくてはならない。社会を変革する剣をふるって自己が社会を斬るのではなく、自己を貫いた剣先で社会をもつらぬく方式である。私が考える革命は、このように社会を構成する原点としての自己にもっともきびしい革命である。

- ③「高校生ボランティア活動」（『内外教育』時事通信社 平成14年9月6日）

- ・青少年の奉仕活動・体験活動を推進するよう提言した中教審答申（7月29日）は、参考として各地の活動事例を紹介している。その一つが山形県内で展開されている地域単位の高校生ボランティア活動。「山形方式」とよばれるこの活動について、答申は「学校単位としてではなく、学校枠を超えて地域単位の活動として行われており、より自主性の高い活動」と評価した。

おわりに

「教育県山形」という言葉をしばしば耳にする。かつて県教育センターが「教育県山形の実像」について『山形教育』で特集を組み論証に努めている。今回改めて調査研究を進め、広く県民に「教育県山形」への思いを新たにすべく、論拠となる資料を収集・整理して、一冊にまとめることに決めたのは、平成15年10月末のことであった。

初稿提出までの期限はわずか1ヶ月。調査員に緊張が走る。さっそく誰がどの機関の資料を収集し、誰に聞き取り調査をするか、担当者を決定して動き始めた。11月10日の第1次集約時には、センター内の資料だけでもかなりの数となり、県内外の大学図書館、県内関係機関、さらに関係者からの聞き取り調査等を加え膨大な資料が集まった。最初は次のような柱立てで進めていった。

はじめに 1 自然と『いのち』 2 『教育県山形』といわれた根拠
3 普及と実践 おわりに

時間との戦いではあったが、一つ一つの資料はこれまでの先人の汗と涙の結晶であり、簡単に読み過ぎることができず、思わず立ち止まっては感動したり、教育に携わる者として考えさせられたりした。こういう機会が与えられなかったなら、おそらく知ることもなかったのではないかと感謝の気持ちが湧いてきたりもした。柱立ても含め、さまざま修正を加えて最終的にこういう形になったが、多くの方々に読んで頂き、御教示いただければ幸いであると考えている。

最後に、本稿をまとめるに当たり、下記の方々に始め多くの方々の御協力を賜りました。すべてを紹介できなかったことをお詫び申し上げますとともに、この場を借りて衷心より感謝申し上げます。

(山家貴代・鈴木寛一 記)

執筆協力者（敬称略）

石島 庸男（山形大学教育学部長）
鬼島百合子（山形大学附属図書館係長）
吉植 庄栄（東北大学附属図書館参考調査係）
渡部 史夫（元教育史編纂室 指導主事）
大塚 浩介（元米沢東高等学校長 教育史編集委員）
楨 清哉（元河北中学校長 教育史執筆者）
渡部 環一（県立博物館館長）
青木 章二（県立博物館教育資料館研究員）
兼子 崇（県史編纂室主査）
田澤 藤明（鶴岡中央高等学校教頭）

『教育県山形』の実像を探る 調査員

山形県教育センター

所 長	野 口 一 雄
副 所 長	秋 葉 春 男
教育相談部長	山 家 貴 代
主任指導主事	鈴 木 寛 一
指 導 主 事	小山田 正 幸
指 導 主 事	岡 村 廣
指 導 主 事	加 藤 勝 徳
指 導 主 事	多 田 和 幸
指 導 主 事	田 中 宏 美

「教育県山形」の実像を探る － 資料調査を通して －

平成16年3月31日 発行

発 行 山形県教育センター

〒994-0021

天童市大字山元字犬倉津2, 515番地

☎ (023) 654-2155